

2011年11月09日
電子出版制作・流通協議会 事務局

第13回 図書館総合展 電流協主催セミナー報告

【開催概要】

2011年11月9日～11日に第13回の図書館総合展が開催され、電流協が主催で電子出版に関するフォーラムを実施した。

【題目】電子出版の現在と未来～電子出版の最新動向と今後のアクセシビリティについて考える

【講演者】丸山信人（電流協 特別委員会委員長、（株）インプレスホールディングス執行役員）

【日時】11月9日（水）10時30～12時

【場所】パシフィコ横浜 アネックスホール 205（定員 105名）

【参加費】無料（一般者も申し込み可能）

【運営体制】電流協事務局

【参加者】事前申し込み者数 103名（会員 53名 非会員 50名）

当日出席者数 100名 [会員 39名（幹事会員 6名、一般会員 17名、賛助会員 12名、特別会員（系）4名）非会員その他 61名：図書館関係者 35名]

途中、国会図書館長尾館長が来場されました約40分ほど講演を聞いておられました。

【配布物】

・電流協ニューズレターvol.4

セミナー会場の様子



【講演概要】

電子出版の現在

[1] 電子出版と電子書籍とは、何が違うのか？

・国内「電子出版市場」の現状と課題

紙の出版と電子出版の販売数や流通構造、制作・製造価格、権利関係や各料率の問題からまだビジネスモデルが確立がされていない。

・電子出版「デジタルによる価値」とは？

デジタルでどのような新たな価値を提供することを考えることが重要。

・電子出版におけるコンテンツの3つのパターン

レプリカ、リフロー、インタラクティブというパターンが電子出版の特徴。

・レプリカ：紙版と同じ表現、紙の出版物の電子化

(PDF形式など)

・リフロー：デバイス上で、ユーザーの意思で文字の大きさ等を変えることができる機能 (EPUB形式など)

・インタラクティブ：出版と別のコンテンツとの組み合わせによりリッチ化する。文字だけではなく、音声、画像、映像へのリンクが可能で紙の本とは異なる表現。

(FOLIO形式など)

インタラクティブの電子出版の事例紹介

最終的に紙の出版物で利用したコンテンツだけでなく、電子出版においては、紙で選択しなかった画像も利用可能となる。

[2] 2010年の電子出版のインパクト

2010年の主な出来事

- ・iPadの発売
- ・グーグルエディション
- ・アマゾンの出版業への進出

国内での電子出版の動き

・三省懇談会の開催

三省が連携することは画期的な出来事。

・電流協、電書協、電流協、電子出版を考える会等の電子出版に関する団体の設立が相次いだ

・行政、民間ともに、非競争領域の検討を行った。

例：電子出版コード、交換ファイルフォーマット等

電子出版の未来

[3] デジタル時代の図書館のありかたについて

- ・日本書籍検索制度提言協議会（GoogleBook 検索に対する対応を検討）
- ・資料デジタル化及び利用に係る関係者協議会
- ・その後、「三省懇」が開催され、この中で、国会図書館の公共図書館データ利用については、権利者（著者・出版社）側と公共図書館側の立場から両論を併記するかたちで報告書がまとまる。
- ・公共図書館での電子出版物の取り扱いについて「電子書籍の流通と利用の円滑化に関する検討会議」（2010年9月～）を設置し、検討会議を実施中。
- ・出版社による「デジタル化時代における図書館の在り方に関する有識者会議」も設置

[4] 各図書館の電子出版に対する期待と課題

- ・各図書館では、紙の書物を保管するスペースが足りなくなってきている。
- ・各公共図書館が持っている、地域の独自資料のデジタル化や利活用のあり方の検討が必要となっている。
- ・学術関係のデジタル化と利活用の検討が必要となっている。
知のアーカイブ研究会（総務省）

・慶応大学メディアセンター（図書館）学術書デジタル化実験の事例

- ・図書館の資料のデジタルアーカイブ
- ・将来は有償貸し出しを検討中
- ・電子出版の図書館の実証事例
 - ・武雄市図書館デジタル化推進協議会

いずれの事例においても、電子出版によって実現する新しい「出版」の価値を創り出していくことが重要。



[5] 電子出版によって実現可能なアクセシビリティについて

・平成 22 年度総務省委託事業、新 ICT 利活用サービス支援事業「アクセシビリティを考慮した電子出版サービスの実現」プロジェクトを電流協が代表受託。

【電子出版アクセシビリティを考える】

- ・誰にでも優しい電子出版をめざして
- ・アクセシビリティ ユーザビリティ
- ・2020 年電子出版アクセシビリティマーケット

(現在の電子出版市場予測に追加される「新たな市場」を電流協が予測)

1500 万人、3000 億円 (コンテンツ 500 億円、ソフトウェア・デバイス 2500 億円)

- ・電子出版アクセシビリティのための技術ガイドラインを紹介
 - 読み上げ (TTS) のための制作ツール (記譜)
 - ・異なる端末でも読める「ユーザーインタフェース機能基準」
 - 文字拡大機能基準 (シニア層にも文字が読みやすい技術)
 - DRM 機能基準 (異なるデバイスやアプリでも「購入した電子出版物」が読めるための基準)
 - ユニバーサル・コンテンツ・コンテナ・フォーマット (UCCF)
 - どのデバイスでも読めるためのデータフォーマット仕様
 - 画像データ (PDF や DTP データ) からのテキスト抽出
 - 過去の出版資産からテキストや画像データを抽出して、利用できる電子出版物化

[6] 電子出版の近未来

「電子出版の市場規模はどれくらい成長するか？」

- ・電子市場規模

2010 年 650 億円 2015 年 2200 億円市場 (インプレス R&D 予測)

「電子出版の拡大は？」

- ・電子出版の拡大のための要素
 - コンテンツアグリゲーション
 - デバイス・情報通信
 - 制作・流通
 - アクセシビリティ

コンテンツアグリゲーション

・電子出版の新たな動きとして「出版デジタル機構 (仮称)」が 9 月 15 日に発表、2012 年 4 月の設立予定。

すべての出版物のデジタル化の集約を推進。各図書館に対する電子出版の提供等も準備検討中。

・ユーザー側の「電子出版の集約」のために、「オープン本棚」を提供予定 (DNP とインプレス R&D が共同開発)

デバイス・情報通信

- ・デバイス市場の 2015 年予測 スマートフォン 2000 万台、タブレット 700 万台

制作・流通

- ・電子出版の制作・流通のイノベーションが必要
- ・「知の拠点」としての図書館、書店が鍵となる。

公共図書館にとっては、地域の情報のアーカイブ化が重要な役割となる。

アクセシビリティ

→すべての本をデジタル化して、すべての人に「本」を「本」として読んでいただける市場をつくる必要がある。

すべての人に提供できるためのアクセシビリティをさらに推進していく。

以 上